

## 様式 C-19

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 28 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720066

研究課題名（和文）江戸時代の養生論の現代的意義に関する研究

—国学者の養生論における養生と教養の関係

研究課題名（英文）A study on the contemporary significance of the hygiene theory of the Edo period—Relationship between education and hygiene of classical scholar's hygiene theory

研究代表者

趙 菁（Zhao Jing）

金沢大学・外国語教育研究センター・准教授

研究者番号：50345641

研究成果の概要（和文）：従来あまり研究されてこなかった江戸後期の国学者鈴木胤の養生論の全貌を明らかにした。鈴木胤の著書である『続養生要論』の翻刻を完成し、鈴木胤の養生論を同時代の他の養生論と比較対照し、国学者としての養生観の特徴を明確にした。さらに、鈴木胤の養生論と江戸後期の庶民に対する教養教育とのかかわりを把握した。特に明倫堂教授の廻村教諭に注目し、庶民教育における鈴木胤の養生論の役割を指摘した。

研究成果の概要（英文）：Revealed that the entire hygiene theory of Akira Suzuki who was a classical scholar of the Edo which had not studied too much. Complete *ZOKUYOJOYORON* of Akira Suzuki for reprint, compared and contrasted other hygiene theory of contemporaries, made clear characteristics of the theory of regimen as a classical scholar. Further, figured the relations with the liberal education toward people in Edo and the hygiene theory of Akira Suzuki. Especially pay attention to the activity of meirin-link village teachers, and noted the role of the hygiene theory of Akira Suzuki on common people education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	300,000	90,000	390,000
2010年度	200,000	60,000	260,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	700,000	210,000	910,000

研究分野：近世文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：江戸文学・養生論・国学者

### 1. 研究開始当初の背景

江戸の中期から後期にかけて、日本では養生ブームが起こった。元禄期から化政・天保期にかけて、数多くの養生論が刊行され、その中に、総合的に養生を述べたもので発行年

のわかるのは130部ほど、発行年の不明なものを加えると300部になり、これに老人・婦人・小児などを対象とした養生論、食事などを事項とした養生論をも加えるとさらに膨大な数になる。これらの養生論は、衛生、栄

養、生理の基礎知識、養育、簡易な治療法などに関する健康論のみならず、道徳観、倫理観、教育観も多く含まれている。人々は病気の有無とは関わりなく養生論を読んでいた。養生は江戸の人々が共有していた文化である。

その時代においては、医師はもとより、儒者、国学者、蘭学者、禅僧、文芸家、絵師などが競って養生論を著した。

養生論が生まれたこのような時代背景、そして養生論と江戸中期以降の医学知識、医学習慣の諸様相との関連については汲田克夫（1968）、樺山紘一（1976）の研究が挙げられる。その中で、樺山の論には養生論の読み手である当時の民衆の知識と習慣を養生論から洗い出そうとしている点も注目されている。最近では、吉原瑛（1998）によって、養生書の出版年表が整理され、養生書に関する資料収集は便利になった。さらに、養生論の研究に新天地を開いたともいえるのは、滝澤利行（1992、1998）の研究である。滝澤は現代社会の健康問題を論じるにあたり、「健康文化」という新たな概念を打ち出し、江戸時代の養生論をこの健康文化の歴史的位相に位置付けている。

個々の養生書についての研究に、常に研究対象として取り上げられているのは貝原益軒の『養生訓』である。『養生訓』研究の重鎮である立川昭二は、益軒の「養生」を「畏れる、楽しむ、惜しむ、めぐらす、自然にまかす」というキーワードの下で総括し（1991）、また、『養生訓に学ぶ』（2001）で『養生訓』の思想、方法、影響を分析した。心身をいたわり、人生を真に楽しむ益軒の養生の思想が現代にいかなる意味があるかについての立川昭二の論説は示唆に富む。

このように養生論研究の研究動向において、全体的な視点から論述するものが相次い

で出されたにの比べ、個々の養生書についての研究は著名なものに集中している傾向があると窺える。江戸期に書かれた養生書には現在閲覧可能のものが70編あり、養生論の歴史に大きな転換をもたらした名著として貝原益軒の『養生訓』を重要視すべきであるが、江戸時代の養生文化の詳細を明らかにするには、それ以外の養生書についての研究も必要である。

本研究の研究代表者が修士課程、博士課程で一貫して研究してきた江戸後期の学者鈴木胤は、国学者であり、また同時に養生書を著わした人物の一人でもある。胤晩年の著書『養生要論』『続養生要論』が好評を得たことは当時の資料に記されているし、また胤は晩年尾張藩明倫堂初の国学教師となり、廻村教諭も行ってた。

鈴木胤の養生論に関する研究には、渋谷宗光（1972）と桜井進（1980）の研究のみ存在する。渋谷は、胤の出身地の文学環境を述べ、『養生要論』を活字化した。桜井は、『養生要論』の成立及び書肆、医学とのかかわりを検討した。これらの先行研究を踏まえ、国学者の養生論の特徴、そして国学教師として教育現場を携わってきた鈴木胤がその養生論を通して民衆にいかなる健康観、道徳観、教育観を示したのかを考察して明確にすべきだと認識し、「江戸時代の養生論の現代的意義に関する研究—国学者の養生論における養生と教養の関係」の研究を着想するに至った。

## 2. 研究の目的

これまでの国学者鈴木胤の研究成果を踏まえ、『養生要論』『続養生要論』を分析し、胤の養生論に見られる独自の健康観、道徳観、教育観を明確にし、尾張藩明倫堂初の国学教師としての胤の教育活動を考察し、当時の教

育現場において養生論がどのような役割を果たしたかを明確にすることを目的とした。

天保の大飢饉で困窮した庶民、過食により健康を失った上流階級を相手に、朧は『養生要論』『続養生要論』において、警告と解決法を与えた。そして、その警告と解決法を語る中で、健康、道徳、教育について論じ、彼が理想とした人間像を人々に訴えたのである。その人間像を作り上げるにあたって、朧は国学・儒学の考えを摂取・折衷する仕方をとっていたのである。本研究はこのような国学、儒学の素養を基底とした朧の養生論を分析することを通して、朧が目指した理想の人間像、人間形成の特徴を析出し、朧が、その時代に向けて、庶民に向けて一体どのようなメッセージを発信したかったのかを明らかにすることを目指した。

### 3. 研究の方法

鈴木朧の養生に関する著書『養生要論』『続養生要論』を中心に、活字化し、注釈をつけ、分析を行うとともに、他の養生論と比較対照するために、江戸時代の養生に関する書物、当時から現在に至るまでの関連文献・資料・研究論文の収集、精読に努めた。養生論に関しては、一般的に出版されたもののほかに、「国書総目録」、「日本衛生史」、「京都大学富士川文庫本」「江戸時代養生書出版年表」などの図書目録から、発行年のわかるものに絞った。また、資料の整理・統括と書誌の作成において収集した資料は整理・統括して資料集・書誌の作成を行った。収集した資料や作品の精読においては、以下の点を主要な着眼点とした。○養生論の著者の学問的背景、社会的背景、養生を論じる視点。○養生論の内容が著者の倫理観、道徳観、学問観や教育観などをどのように表しているか。

活字にした『続養生要論』および『養生要論』『続養生要論』についての考察・分析の

成果を論文にまとめ、学術雑誌に投稿した。

### 4. 研究成果

まず、『続養生要論』の活字化に到達するという点では、漢字のくずし方に独自の決まりがある朧の文章を活字にするのは困難な作業であったが、本研究は刈谷図書館村上文庫所蔵の『続養生要論』刊本を底本として『続養生要論』の全文の翻刻を完成した。また、『続養生要論』と『養生要論』の書肆の比較、『続養生要論』に言及された人物、『続養生要論』の出版にかかわる重要人物について注釈を施した。特に『続養生要論』の出版支援者でありながら、天保期に海部郡・海東郡で明倫堂教授の廻村教諭を実施した尾張海部郡荷之上村の豪農・服部弥兵衛家八代凱について注目した。

次に、先行研究には『続養生要論』に関する紹介と考察はほとんど見られなかったが、本研究は、活字化に続き、『続養生要論』と『養生要論』の内容について、以下の三つの視点から考察、分析を行った。

(1) 『養生要論』と『続養生要論』の読者層、他の養生書との比較対照については、

① 『養生要論』『続養生要論』の読者層について、弟子（例えば、書家丹羽昶、国学者植松茂岳、神官栗田直政、戯作者高橋広道等）、推進者（服部弥兵衛）のみならず、歌友の存在も明らかにした。鈴木朧『借書簿』及び『離屋詠草』の考察を通して、『養生要論』に関する歌友鈴木急弥とのやりとり、そして『養生要論』を出版した後の気持ちを表した短歌の存在を発見し、『養生要論』と『続養生要論』にまつわる周辺事情を分析した。桜井進は『養生要論』の読者を「過食によって健康を害した都市民衆」と論じたが、本研究はその都市民衆をさらに具現化することに努めた。

② 『養生要論』『続養生要論』とその書肆、

貸本屋（大野屋惣八）とのかかわりを分析した。利用頻度、利用者層、貸出頻度が示されず、単なる書名のみ掲載されている貸本屋のリストからは、『養生要論』『続養生要論』の庶民による受け入れ度合いは推し量りがたい。『養生要論』『続養生要論』を含め江戸期の養生関係書の流通には、貸本屋の役割を無視してはいけませんが、貸本屋の蔵書目録のみならず、借りた人の記録にも考察、検討する必要があることがわかった。

③他の養生書との比較検討については、貝原益軒『養生訓』のみならず、従来指摘されていない曲直瀬道三『道三翁養生物語』、田中雅楽郎『田子養生訣』との関連を明らかにした。特に、田中雅楽郎『田子養生訣』については、その刊行年に、艮の蔵書目録である『離屋蔵書目録』には、艮の書き入れが入った『田子養生訣』が存在したことが考察によって明らかになった。両者のつながりをさらに追及する必要があるが、『養生要論』に鍛練、勤労活動を養生とみる考えの根底には、導引や徒手運動の方法を詳しく論じる『田子養生訣』からの影響があるのではないかと考える。

(2)『養生要論』と『続養生要論』の内容分析において、「養生の肝要は貧窮下賤の身のうへに倣にあり」をキーワードに、「養生の道」を「中分の人やしのび」とする艮の考えに見られる中庸の影響及びその応用の仕方を明らかにした。また、「身の持ち方」は「中分」、「徳行道芸」の修行は「中分以上」を目指す艮がその養生論を通して伝えたい、人間形成の過程及び人間形成の目的を明確にすることができた。本研究は艮の養生論に示される徳道観・学問観・教育観を析出することで、人間形成における艮の養生観の思想的本質の解明に至った。

(3) 艮の養生論と江戸後期の教育現場とのかかわりについて、特に明倫堂教授の廻村教

諭に注目し、庶民教育における艮の養生論の役割を分析した。その中で、特に廻村教諭の推進者である庄屋たちの考えと艮の考えの相違点を取り上げ、両者の比較を行った。

廻村教諭を考えた庄屋にとって、艮を指名する理由はその学識の高さと知名度はもちろんのこと、『養生要論』の文体、内容が村人の教育にも有利であることが考えられる。これは廻村教諭の中心人物である服部弥兵衛家八代凱が『続養生要論』の出版に積極的に推進したことからもうかがえる。廻村教諭において、庄屋たちは「質素を守、孝弟を励、農事を勤」ことを村民に教育する適任者として艮を指名したが、国学者としての艮は、その徳道観・学問観・教育観には質素、勤労だけではなく、徳行道芸、材智技能の修行充実も含まれている。艮と庄屋の認識の違いこそ、艮がその養生論を通して民衆に最も伝えたいメッセージであると考えられる。

本研究は研究成果を学術雑誌に投稿し（『続養生要論』の翻刻を『言語文化論叢』第15号、第16号に、『養生要論』と『続養生要論』の内容分析を文芸誌『大地』（48号）に）、また、第29回鈴屋学会大会研究発表において「鈴木艮の養生観—「貧窮下賤の身のうへに倣にあり」の視角から—」をテーマに艮の養生観と教養との関係について発表した。今後は、鈴木艮の養生書のみならず、江戸期で出版された養生書について、諸文庫、市史、藩史、地方の有力者、知識人の蔵書目録、日記などの資料にそれに関する情報を調査し、養生書の受け入れ程度をさらに明確にし、江戸期の養生ブームを支えた養生文化における養生と教養の関係を一層解明することを目指したい。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- (1) 趙 菁、「鈴木胤の『続養生要論』(二)」、  
『言語文化論叢』、査読無、16号(2012)、  
153-168
- (2) 趙 菁、「江戸の健康観から学ぶもの—  
「不憂不懼」と「厠」—国学者の養生論」  
『大地』、査読有、48号(2011) 65-72
- (3) 趙 菁、「鈴木胤の『続養生要論』(一)」、  
『言語文化論叢』、査読無、15号(2010)  
169-186

〔学会発表〕（計1件）

- (1) 趙 菁、鈴木胤の養生観—「貧窮下賤の  
身のうへに倣にあり」の視角から—、第29  
回鈴屋学会大会、2012年4月22日、本居宣  
長記念館（三重県）

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

趙 菁 (Zhao Jing)

金沢大学・外国語教育研究センター・准教授  
研究者番号：50345641